

広島市西区草津・田方所在

# 草津城跡発掘調査報告

1983.3

広島市教育委員会

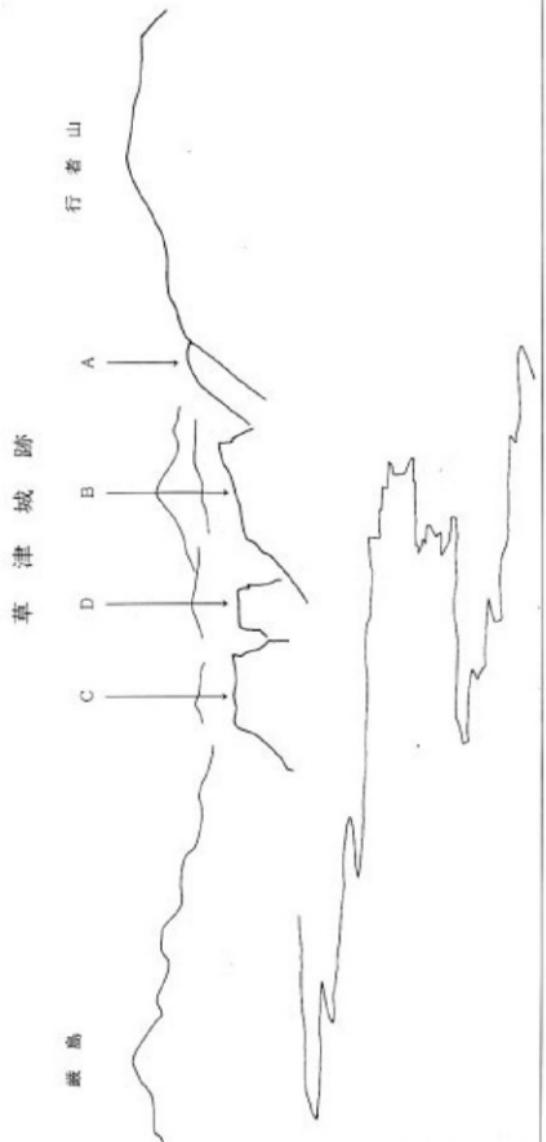
草津



都志見往来諸勝圖（広島市立中央図書館蔵）

〔草津〕

草津



A・B・C・Dは郭群をあらわす

## はしがき

広島市内には、中世山城が約150か所確認されています。このたび調査した草津城跡もその中世山城の一つであり、文献等によりますと水軍が拠点としていたといわれています。

今般、道路建設に伴い、記録保存を行うためにこの草津城跡の発掘調査を実施しましたが、調査区域が道路にかかるところだけで城跡全体ではなかったので、草津城の全容を明らかにすることはできませんでした。しかし、当時の山城の形状を知る上で貴重な資料を得ることができました。

昨年、広島市内の中世山城の所在確認調査結果を『広島市の文化財第20集・山城』として刊行しましたところ、各方面から問い合わせがあいつぎ、市民の方々の山城についての関心がたいへん高いことを感じました。草津城跡もこの報告書『山城』に収録されているものの一つですが、今回の調査により、内容的に新しい資料を加えることができました。

本報告書が、先の『山城』とともに、市民の方々の山城研究や地域の歴史学習をすすめられるうえで、ご活用いただければ幸せです。

おわりに、今回の調査にあたり、ご指導をたまわりました諸先生および、ご協力をいただきました建設局草津沼田道路建設事務所の方々、ならびに炎天下、発掘作業に従事くださった多くの方々に厚くお礼を申しあげます。

昭和58年3月

広島市教育長 藤井 尚

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路草津沼田線建設に伴い、昭和57年4月26日から8月11日までの間実施した草津城跡の発掘調査報告である。
2. 今回の発掘調査は、草津城跡のA郭群北西部について実施したものである。
3. 発掘調査は、広島市建設局草津沼田道路建設事務所から依頼を受けて、広島市教育委員会が実施した。
4. 遺物の洗浄・復原等の整理作業の一部は、保存科学研究会に委託した。
5. 本書の執筆は、II・III・IV・Vを中村眞哉、I・VIを橋本義和が担当した。
6. 第1図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を25%に縮尺・複製したものである。

(承認番号 昭58中複第79号) 図幅名: 広島・海田市・嚴島・呉

## 目 次

I はじめに .....	1
II 遺跡の位置 .....	3
III 遺構 .....	5
IV 遺物 .....	9
V 小結 .....	10
VIまとめ .....	11
1. 草津城の歴史	
2. 草津城の性格	

## 図 版 目 次

卷頭図版	都志見往来諸勝図（草津）
図版 1.	草津城跡全景（航空写真）
図版 2. 1.	草津城跡（調査前・北西から）
	2. 草津城跡（調査後・北西から）
図版 3. 1.	第1郭・第2郭（南から）
	2. 第1郭・第2郭（北から）
図版 4. 1.	第3郭（南から）
	2. 第1郭柱穴群
図版 5. 1.	石列（南から）
	2. 石列（西側中央部分・西から）
図版 6. 1.	第1号土壤（西から）
	2. 第2号土壤
図版 7.	青磁碗

## 挿 図 目 次

卷頭図版説明図.....	卷頭図版裏
第1図 草津城跡周辺山城分布地図.....	折り込み
第2図 草津城跡周辺地形図及び郭群配置図...	2
第3図 草津城跡地形測量図.....	4
第4図 草津城跡断面実測図.....	5
第5図 草津城跡遺構配置図.....	折り込み
第6図 第1郭柱穴群実測図.....	6
第7図 石列西側南端部分実測図.....	7
第8図 石列西側中央部分実測図.....	7
第9図 第1号土壤実測図.....	8
第10図 第2号土壤実測図.....	8
第11図 青磁碗実測図.....	9

# I はじめに

広島市教育委員会では、昭和55年1月、都市計画道路草津沼田線が広島市西区草津及び田万所在の草津城跡の一部にかかることを知った。そこで広島市建設局草津沼田道路建設事務所と本城跡の取り扱いについて協議を重ねたが、地理的条件等から設計変更は不可能であり、記録保存もやむなしとの結論を出すに至った。これをうけて、広島市教育委員会は、昭和57年4月から発掘調査の準備にかかり、4月25日より調査を開始し、8月11日に終了した。

調査の実施に係る関係者は、下記のとおりである。

調査依頼者 広島市建設局草津沼田道路建設事務所

調査主体 広島市教育委員会

調査担当係 広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係

調査関係者 森脇 昭之（社会教育部長）

川崎 良馬（ タ 課長）

佐藤 譲門（ タ 主監）

木原 亮（ タ 課長補佐兼文化財係長）

石田 彰紀（ タ 文化財係主事）

松垣 栄次（ タ タ タ ）

平元 一人（ タ タ タ ）

幸田 淳（ タ タ タ ）

池本 公二（ タ タ タ ）

阿 部滋（ タ タ 主事補）

吉本 由紀（ タ タ 嘱託）

藤井 孝章（ タ タ タ ）

調査者 中村 真哉（ タ タ 主事、調査主任）

橋本 義和（ タ タ 主事補、調査担当）

調査補助員（順不同）

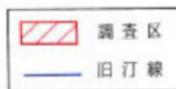
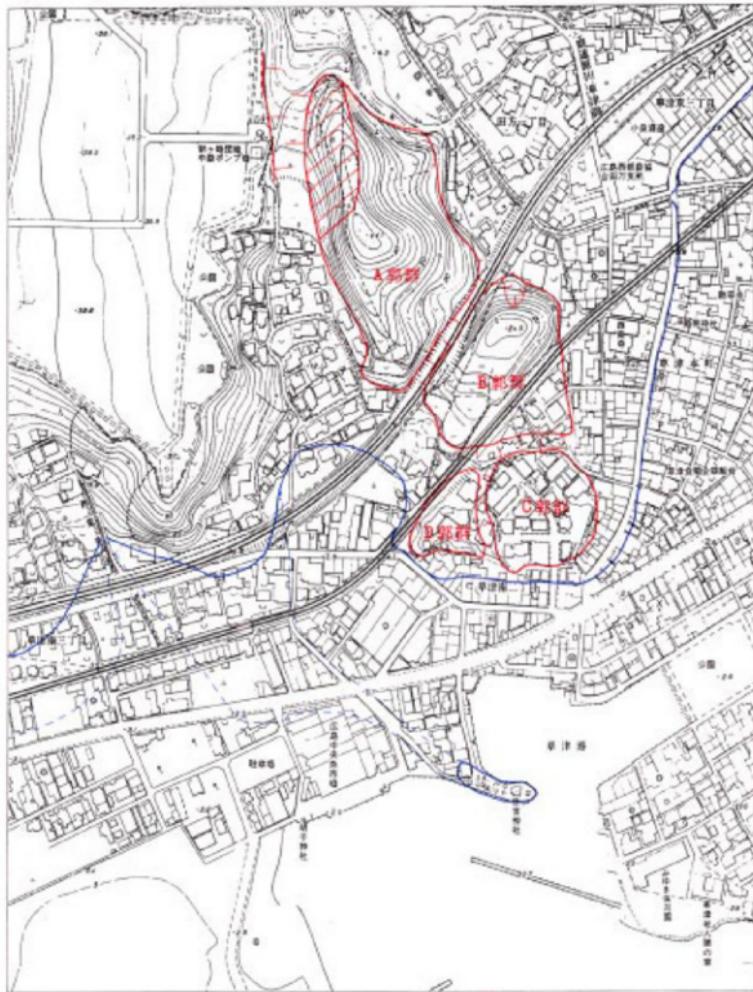
岩本明美、大浜茂、大宗千幸、音堂敏太郎、笠岡博子、笠岡博、川上コノエ、木戸英昭、昇地瑞枝、隅田京子、高田シズエ、西原ツヤ子、原田耕治、福地勝美、藤井富子、藤本政一、松浦史、三戸英子、南シズ子、三野丈一、三好謙二、元松由紀、矢島博子、山田智恵子、吉田秀雄、河合淳子

なお、広島市建設局草津沼田道路建設事務所には、調査に係る経理事務等を担当していただき、はにわ会員井手三千男氏、草津公民館大津守男館長はか職員の方々には、調査を円滑に進めるため多大なご配慮を頂いた。また、報告書の作成にあたっては広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、岡山県・香川県・高野市・高松市・姫路市の各教育委員会、広島県立安西高等学校教諭加藤光臣氏及び、地元在住の大崎直信氏ほか地元の方々には広範な教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。

1. 伟德峪村 2. 铁子峪村 3. 行宫山村 4. 焦子峪村 5. 已家沟村  
6. 钱庄村 7. 沈阳村 8. 仁义村 9. 兴隆村 10. 何村村 11. 五里铺村

第1图 佳木斯市同江山城分布地图





第2図 草津城跡周辺地形図及び郭群配置図

## II 遺跡の位置

草津城跡は、広島市西区草津・田方にまたがって所在する中世の山城である。本城跡は『芸藩通志』によれば「田方城」と記されているが（注1），中世の草津村は、現在の田方を含む古江村をも合わせたものであること

から（注2），本報告書では、草津城跡と称することとする。

本城跡は、広島湾の西岸にあり、鈴ヶ峰（標高320.6m）から海に向って南東に派生する尾根の先端部に位置している。本城跡の東側には、御幸川が南流し、広島湾に注ぐ。

本城跡は、4つの郭群からなり、各郭群は4本の堀切によって区分されている。これら郭群を北側から順に、A・B・C・D郭群とした（注3）。この4つの郭群は、『芸藩通志』によれば、古江分（A・B郭群）と草津

分（C・D郭群）に分かれる（注4）。4つの郭群のうちC・D郭群は、現在宅地化されており、B郭群の北側には

山陽本線、南側には広島電鉄宮島線が通っている。なお、文政2年（1817）の『草津村・国郡志御用下しらべ書出帳』によれば、C・D郭群の高さは41間（約74m）と記されている。この数値をそのまま信じることはできないにしても、当時、かなりの標高をもっていたことが予想される。

草津周辺は、江戸時代以後、順次干拓が行われ、とくに明治3年からの庚午新開と昭和41年からの西部開発事業に伴う埋立により、その地形を大幅に変えている。しかし、草津は中世においては、鈴ヶ峰・鬼ヶ城山などから派生する尾根が海に迫り、平地が狭く、農耕地の求めがたいところであった。一方、草津は広島湾の西岸にあり、音戸の瀬戸から嚴島へ向う瀬戸内海の主要航路上に位置していた。このことから、草津は農業経営の場としてではなく、海上交通さらに軍事上の要衝として注目され、この地に城が築かれたものであろう。

なお、本城跡は、上記の埋立のため、現在ではやや内陸にあるが、当時は海と接していたものと考えられる。

今回発掘調査を実施したのは、標高44.1mを測るA郭群の北西部であり、草津城全体で最も北側に位置する部分である。本城跡が南の海上を意識したものであること及び各部群の配置などから、調査区域は本城跡の搦手にあたる部分と考えられる。

なお、本城跡の周辺には、行者山城跡、鬼ヶ城跡、鈴ヶ峰城跡などの山城がみられるが、本城跡との関係は明らかでない。

注1. 『芸藩通志』卷55

注2. 『草津村・国郡志御用下しらべ書出帳』

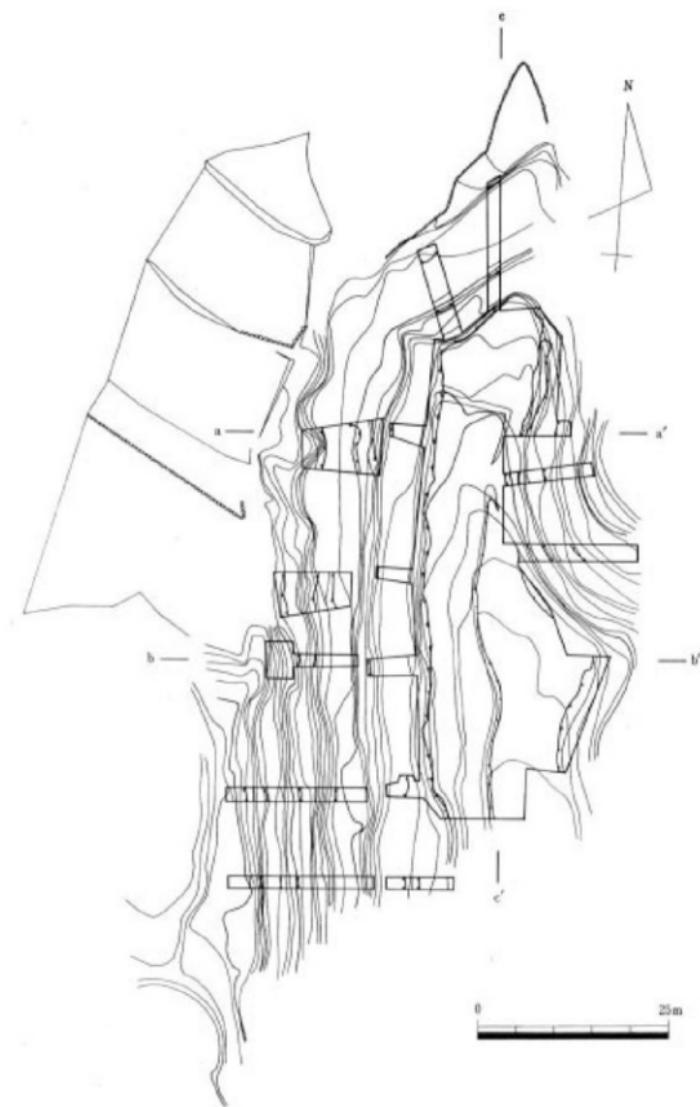
『古江村・国郡志御用二付下しらべ書出帳』

注3. 『芸藩通志』卷49、卷55

『都志見往来諸勝図』草津

なお、広島市教育委員会編『山城』1982では、A・B・Cの3つの郭群としていたが、今回の調査の結果、從来C郭群と呼んでいた南側の郭群が2つに分かれていることが明らかになった。

注4. 注1に同じ。

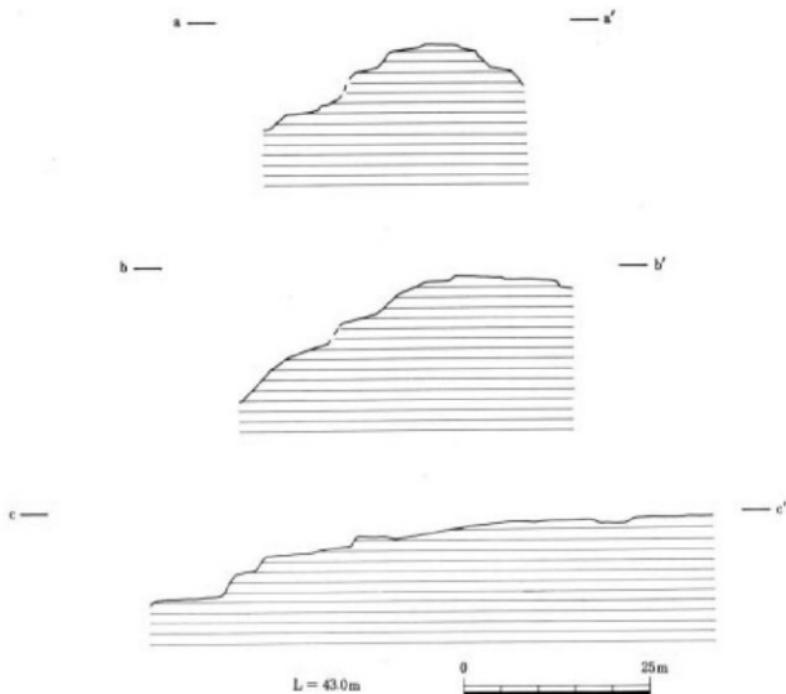


第3図 草津城跡地形測量図（赤は調査区域）

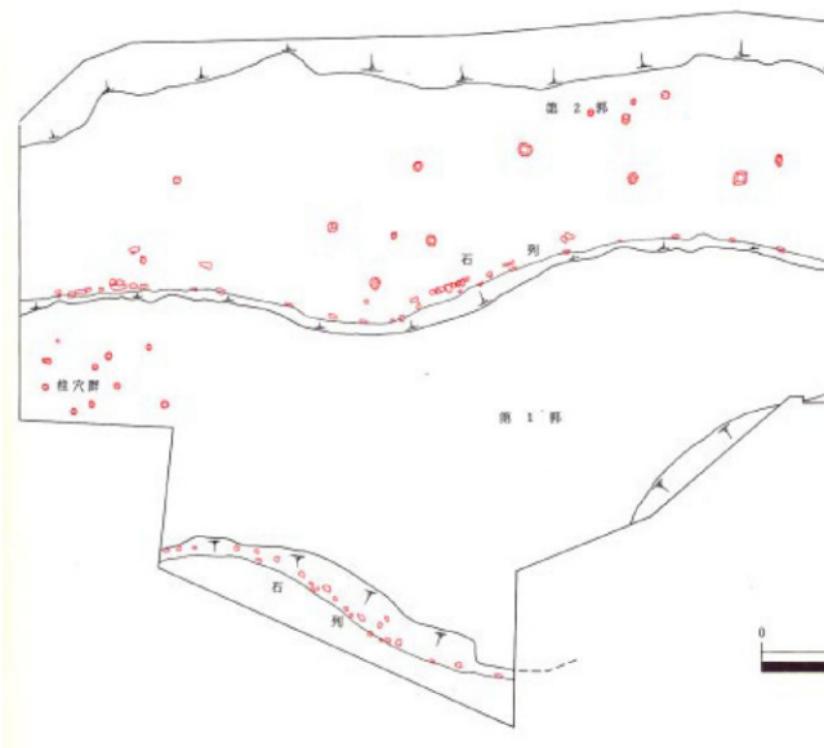
### III 遺構

今回発掘調査を実施したA郭群の北西部は、調査前は、竹林あるいは山畠であったが、それ以前に全体が畠として耕作されており、地形変更が著しかった。そのため、遺構の検出は困難をきわめたが、尾根の頂上部から3つの郭が検出された。このうち、最高所にある郭を第1郭、第1郭の西側に配されている郭を第2郭、第2郭の北側に配されている郭を第3郭とした。

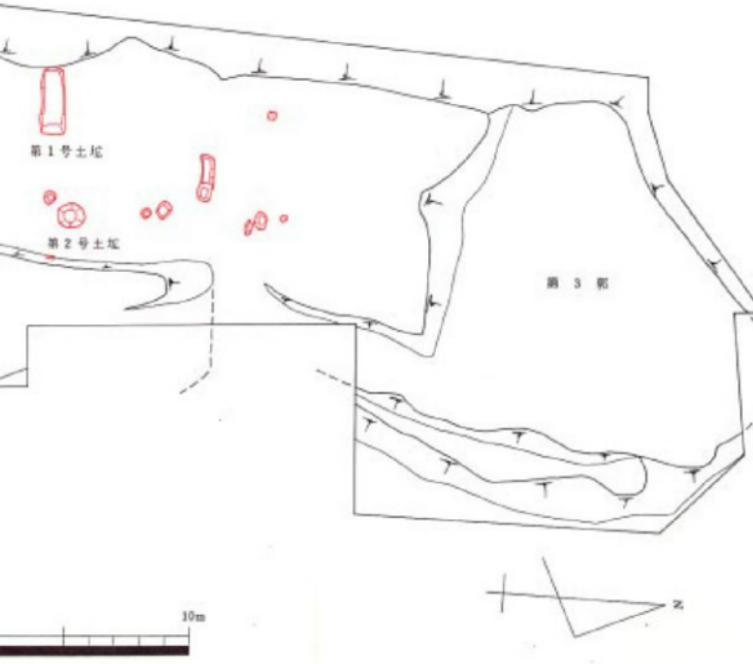
なお、発掘調査の当初、表面観察により、腰部等の存在が予想されたため、東・北・西側の斜面に合計10本のトレントを設定した。その結果、合計6本の細長い段が検出された。しかし、これらは、①幅が狭く、階段状を呈していること。②山城に伴うと考えられる遺構及び遺物の検出が皆無であること。③表層に土砂の流出を防ぐための石垣のみられる部分があったこと。④この部分が本城跡の掘手にあたると考えられることから、機能的にみて、6本もの腰郭を設ける必要がないこと。などから郭の可能性はきわめて少なく、後世の地形変更によるものと判断するに至った。



第4図 草津城跡断面実測図



第 5 図 原井成層図



構配図

## 第1郭

第1郭は、標高42.3mを測り、調査区域内の最高所を占める。この郭は南から北へのび、長軸は約37m、短軸は最大部で約14mを測る。しかし、南側では、郭の先端が検出されていないため、第1郭は、調査区域外までのびていることが推測される。また、第1郭の地山土には、10~30cmのきわめてうすい耕作土が堆積しているのみであり、後世の開墾による広範な地形変更を予想させるが、とくに東側の北半分は、そのいびつな形状から、開墾に伴なって削り落されたものと考えられる。

第1郭から検出された遺構としては、南隅に柱穴群がある。また第1郭と、第2郭及び第1郭の東側にある平坦面との境界から石列が検出されている。

なお、第1郭の東側から検出された一段低い平坦面は、第1郭との比高差約70cmを測る。これは、調査区域の東端から検出されたため、その全容を明らかにすることはできなかったが、その位置関係からみて、たとえば武者走りなどの機能が推測される。

### 柱穴群（第6図）

第1部の南隅から検出された柱穴と考えられる6個のピットであり、第6図のように最も北側にあるものから右まわりにP1~P6とした。なお、P4は2本分の柱穴と考えられるが、その時間的前後関係は不明である。

これらの柱穴は、深さ20~35cm、径20~40cmを測る。P2・P3・P5・P6は、ほぼ方形に並んでお

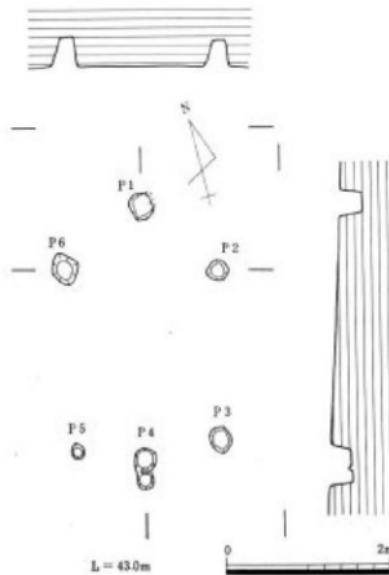
り、一辺の距離は2m前後を測る。さらに、P1とP4はその方形を東西に2分する位置にある。

このような柱穴の位置関係及び、柱穴が比較的小型なことから、P1とP4を主柱とし、他の4本を副柱とする6本柱の掘立柱系の建物を想定することができる。

### 石列（第7図、第8図）

第1郭をとり囲むように、東側と西側から検出された石列である。東側は、第1郭と東側平坦面の境界、西側は第1郭と第2郭の境界で検出されている。東側は約14m、西側は約33mにわたって、第1郭に沿って屈曲しながら南北にのびるが、両方とも調査区域外までのびることが推測される。

使用されている石材は、長さ20~30cm、幅20~30cm、厚さ10~15cmほどの小型のものが大半を占める。これらの石材のうち、内側（第1郭寄り）にあるものは地山に接しているものが多く、埋め込まれた状態のものもみられる。一方、外側にあるものの多くは、地山に接しておらず、西



第6図 第1郭柱穴群実測図

側の一部では2～3段に積み重なっているものもみられる。このことから、これらの石材は、本来、内側に積み重ねていたものであり、基底部にあったもの一部が内側に残存し、上段にあったものは外側に崩落したと考えられる。

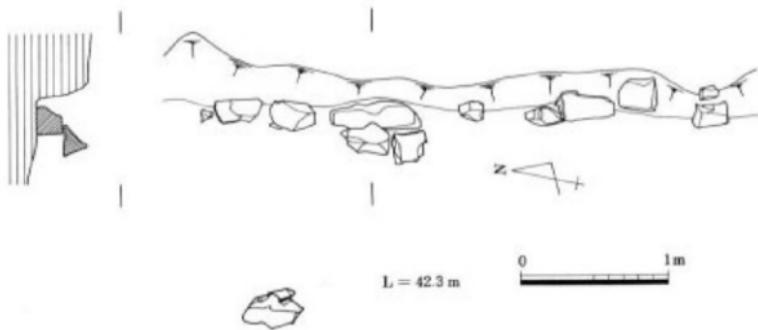
この石列は、①第1郭をとり囲むように配置されていること。②基底部にあったものは地山を加工して据え置かれていることなどから、山城に伴う遺構と考えられる。

なお、基底部にあたる石材が小さすぎるのことから、この石材を石垣の残存部とは考え難い。さらに、第1郭と第2郭及び東側平坦面との比高差が小さいことなどから、第1郭を区分するための何らかの構造物が設けられていたものと考えられる。

## 第2郭

第1郭の西側に配された郭であり、第1郭北端よりさらに北側に約8mのびている。第1郭との比高差は約50cmを測り、長軸約50m、幅5.25～8mを測る南北に細長い郭である。第2郭も後世の耕作の影響を受けており、そのため第2郭から検出されたピットは概して浅い。また、西側半分は、地山面が西に向かって傾斜する部分と、1段低くなつて平坦になる部分とに分かれ、とくに地形変更が著しい。

なお、第2郭からは柱穴列と2つの土壙が検出されている。



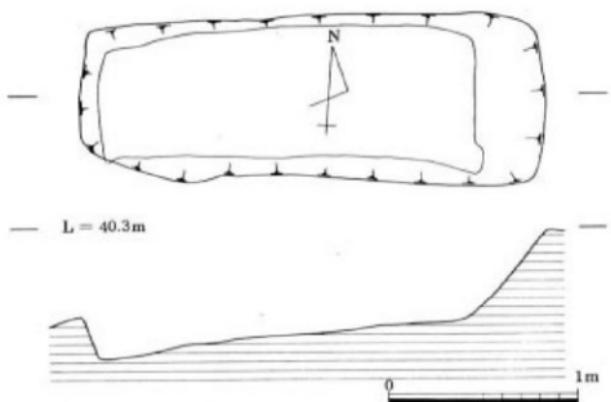
第8図 石列西側中央部分実測図

### 柱穴列

第2郭から検出された柱穴と考えられる23個のピットである。これらは径20～50cm、深さ10～35cmを測る。柱穴相互の位置関係は第5図に示すとおりであり、柵を連結させるための柱穴として利用された可能性が強い。

### 第1号土壤（第9図）

第2郭の北寄りから検出された土壤であり、主軸を東西にとり、ほぼ長方形のプランを呈する。規模は、上縁部で長さ245cm、幅70～98cm、底部で長さ198cm、幅62～76cm、深さ25～95cmを測る。また、底面は西側にやや傾斜している。



第9図 第1号土壤実測図

### 第2号土壤（第10図）

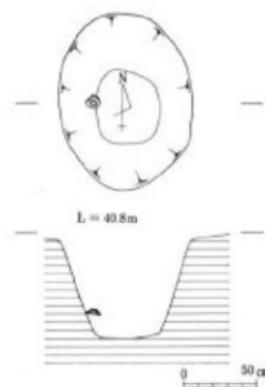
第2郭の北寄り、第1号土壤の東約5mの地点にあり、円形のプランを呈している。上縁径110×90cm、底径約45cm、深さ約60cmを測り、底面は平坦である。

土壤内から、磁器片が1点出土しているが、土壤の性格は不明である。

### 第3郭

第2郭の北側に配された郭であり、第2郭との比高差約1.2mを測る。第3郭は、南北は最大部で約12m、東西は最大部で約13mを測り、三角形に近いプランを呈する。

検出時の地山の状態からみて、第3郭は、基本的には、第2郭の先端部から地山をL字状に掘り下すことによって築成したものと考えられる。もっとも、地山面には2～3段の小さな段がみられるなど、後世の耕作の影響を受けていると考えられ、築成方



法の詳細は確認できなかった。

第10図 第2号土壤実測図

なお、第3郭の東南隅から、幅1.5～2mの狭い平坦面が南へのび、第2郭へとつづく。これは、第3郭と第2郭を結ぶ通路の可能性がある。

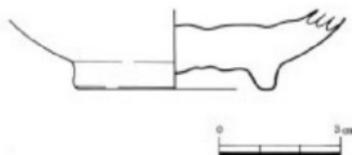
## IV 遺 物

本城跡の発掘調査により、若干量の陶磁片など他、須恵器片1点を得たが、そのほとんどが西側斜面のトレンチから流れ込みの状態で検出されたものであり、本城跡との直接的な関連は把握できなかった。遺物のうち遺構に伴うと考えられるものは、第2号土壤内出土の青磁碗のみである。

なお、須恵器片は、小片であるため図示し得なかったが、甕の一部と考えられるものである。

### 青磁碗（第11図）

第2号土壤の底面、地山直上から出土した底部の破片で、底径4.8cm、高台の高さ8mmを測る。高台は削り出してつくっており、底部の内外面にはうずまき状の整形痕がみられる。高台の先端を除いて全面に淡緑灰色のうすい釉薬がかかっている。



第11図 青磁碗実測図

## V 小 結

今回の発掘調査により、3つの郭とそれに伴う遺構が検出された。しかし、調査区域がA郭群の北西部、前面の海上を意識して築かれた本城跡の掲手部分にあたり、さらに、後世の地形変更を受けていることから、検出された遺構・遺物はわずかであった。検出された3つの郭のうち、第1郭は最高所にあり、南から北へのびている。その西側に第2郭が配され、第1郭よりもさらに北へのびている。第2郭の北側には第3郭が配され、第2郭と第3郭を結ぶ通路状の遺構もみられる。また、第1郭から建物跡第2郭から柵列の跡と推定される遺構が検出され、さらに、第1郭を区分するための施設のあったことが推測される。

草津城跡は、4つの郭群からなり、鈴ヶ峰から南東へ派生する尾根の先端部に築かれたものである。すなわち、A郭群の北西側、A・B郭群の間、B・C郭群の間、B・D郭群の間の尾根に堀切を配置することによって、各郭群を独立させたものである。A郭群は、4つの郭群のうち最大であり、最も海から離れた地点に位置している。B郭群は、A郭群の南にあり、比較的よく旧状を保っているため、現状からも北東側に縱堀が設けられていたこと及び頂上部に3～4の郭が配されていたことが推測できる。C・D郭群は宅地化され、現在はその範囲が推測できるにすぎないが、地形及び文献（注1）などから、B郭群の南にあり、東側のC郭群の方が西側のD郭群よりも規模が大きかったことがうかがわれる。もっとも、本城跡は、南北にきわめて長く、全長約450mにも及ぶため、他の山城の例からみて、当初から4つの郭群をもっていた可能性は少ないと考えられる。

今回の発掘調査は、長大な草津城跡のごく一部にすぎない。そのため、今回の調査成果のみで、本城跡の全容を明らかにすることは非常に困難であり、その全容については今後の調査を待って検討したい。

注1.『芸藩通志』卷49、巻55

『都志見往來諸勝図』草津

## VI まとめ

### 1. 草津城の歴史

文治元年（1185）の平氏滅亡を機に、安芸国の武士の様相は一変する。同年、まず平氏残党・源義経らの追捕のため、平氏方の在地領主に代り、東国武士が安芸国の守護・地頭として置かれ、ついで、承久3年（1221）の承久の変の結果、上皇方にいた武士たちの所領は没収され、新たに東国武士が守護・地頭として補任されたが、これらの武士の多くはまだ東国に本拠を置いていた。しかし、文永11年（1274）の蒙古襲来を契機として、安芸国守護の武田氏をはじめ、これらの武士もしだいに安芸国内の所領に本拠を移し、その拠点として山城が築城されていった。

元弘3年（1333）に鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇を中心とした朝廷政権が成立したが、建武2年（1335）の足利尊氏の挙兵をきっかけとして、いわゆる南北朝時代に突入し、全国で武士たちが南朝方と北朝方に分かれて争い、安芸国内においても矢野城などを舞台として両者が戦っている。このような状況を背景として安芸国守護の武田氏は、守護としての権能を利用して所領の拡大を図ったが、毛利氏・吉川氏・小早川氏・嚴島神主家などの有力領主も自らの所領拡大を図ったため、武田氏は勢力を伸ばすことができず、佐東郡及び山県郡南部を領国化するに留まっている。また、この頃の安芸国は、西の大内氏と東の細川氏との二大勢力の接点となっており、これらの武士たちも両勢力に分かれて、己斐・東西条などでたびたび抗争をおこしている。

やがて、応仁の乱（1467～1477）が始まると、安芸国内の武士たちは、山名方（嚴島神主家・野間氏・阿曾沼氏など）と細川氏（武田氏・毛利氏・熊谷氏など）に分かれて争っている。しかし、この時期の武士の動向は非常につかみにくく、その時々の情勢を判断し、都合の良い方に組みするという離合集散を繰り返している。

永正5年（1508）、大内義興に従い上洛していた嚴島神主家與親の死後、その相続をめぐる争いが起こったに乗じて、安芸国守護の武田元繁は、広島湾頭での勢力拡大を狙ったが、大内義興の命をうけた毛利元就の前に破れ去った。その後、大内義興は帰国すると安芸国内での勢力伸長を図るために、嚴島神主家の争いに付け込んで安芸国内に侵入し、嚴島神領を含む佐西郡を直轄領として己斐城・桜尾城・石道本城に城番を置いた。

大永3年（1523）になると、応仁の乱が終った頃から細川氏に代って、しだいに勢力を伸ばしてきた出雲の尼子氏の安芸国侵入が活発化してきた。尼子氏は、安芸国守護の武田光和等をもって、大内方の己斐城・桜尾城等の城を攻め落とし、同年5月には、尼子經久自ら軍勢を率い、大内氏の安芸国での軍要拠点である東西条の鏡山城を攻略しており、安芸国内における尼子氏勢力は急速に拡大していった。

しかし、同年8月から大内氏の巻き返しが始まり、徐々に領土の回復を図り、天文10年（1541）1月には、大内方の陶・毛利の連合軍が尼子軍を敗走させ、5月には、武田氏の本拠である銀山城を攻略した。その結果、安芸国はほぼ大内氏の勢力下に入り、銀山城・桶山城・桜尾城などの重要拠点には大内氏より城番が配された。

天文20年（1551）、陶晴賢によって大内義隆が倒された後、その隙を縫って毛利元就は広島湾頭に向けて勢力を伸ばし、銀山城を含む佐東郡を手中におさめた。さらに、毛利氏は大内義長・陶晴賢と対決する姿勢をとり、天文23年（1554）に己斐城・草津城・桜尾城等の城を手に入れ、安芸国内における大内氏勢

力の一掃を図った。

また、毛利氏は弘治元年（1555）の厳島合戦で陶晴賢を、同3年（1557）には大内義長を討ち、中国地方を治める大守にしあがり、ここに安芸国もこの安定した政権の下で新しい時代を迎えるに至った。しかし、この政権も長くは続かず、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦で、徳川家康率いる東軍の前に敗れ去った毛利輝元は萩に転封され、代って福島正則が安芸・備後の領主としてはいった。福島氏は、交通の要衝に位置する城郭の強化に努めたが、元和元年（1615）、幕府により一国一城令が出された後、山城はその役割を急速に失っていった。

さて、今回調査を行った草津城について、文献上にその名称が現われるのは、大永4年（1524）6月7日付の「大内氏奉行人連署書状」が初見であり（注1）、それには資料1のような記述がみられることから、草津城は遅くとも大永3年（1523）には、その存在が示唆される。

この頃の佐西郡は、大永3年（1523）前半期に尼子氏を後ろで己斐城・桜尾城等を攻略し、広島湾頭に侵出した武田氏勢力と同年8月からその領土の奪回を狙う大内氏勢力との接点となっている。こうした状況下で大内氏は、同年末までは佐西郡の中ほどに位置する草津城を勢力下に置いていたと考えられ、このことは、佐西郡における尼子氏勢力の分断を図るという意味から、本城が重要な役割を果たしていたことを示唆している。

その後もこの地は重要視されたとみて、幾度か攻撃をうけている。まず、前述の抗争で大内方の城となつた草津城は、大永5年（1526）に武田方に攻められ、家臣の1人が矢傷を負っている（注2）。ついで、天文23年（1554）に厳島合戦の前哨戦として、草津城は仁保城・桜尾城等の城とともに、毛利元就により攻略されており、これを境として広島湾頭は、毛利氏の勢力下に組み込まれていった。しかし、大内氏は広島湾頭を奪回するため、警固奉行人の職を白井氏に与えており（注3）、これに応えて白井氏は活発な軍事活動を展開し、天文24年（1555）1月には、草津城下を襲い、船を奪っている（注4）。

資料1

大内氏奉行人連署書状  
(大内家西利惣兵衛書写)

去年大永以来合隨義弘中務述、於草津于今在城神妙之間、  
先以得其心能々可中之出候、欲忠肝要候、恐々謹言、

六月七日

武總判  
同

光井三郎次郎殿

資料2

大内氏奉行人連署書状

田方城 古江、草津二村の界にあり、羽仁誠前が所属、  
厳島の役に海に殉して戦死す、其後は毛利家より、兒  
玉麻勝をして守らしむといふ、

弘治元年（1555）の厳島合戦の2ヶ月前、毛利元就は仁保城番に定めておいた佐東衆を仁保に渡らせ、残りの兵を草津に出兵させている（注5）。このように、厳島合戦にむけて着々と足場を固めていった毛利氏は、三島村上氏らの協力を得た厳島合戦において、陶晴賢率いる大内勢を打ち破っている。

その後、関ヶ原の戦の結果、毛利輝元は萩に転封され、代って福島正則が安芸・備後の領主としてはいり、領国経営の拠点として亀居城などの交通の要衝に位置する城郭の整備・構築を行っていることから、本城は、元和元年（1615）の一国一城令が出された頃まで使用されたと考えられる。

では、草津城の城主についてみると、『芸藩通志』に資料2のような記述がみられ（注6），それによると、羽仁越前と児玉周防の名がみえ、厳島合戦の直前、天文23年（1554）5月12日に毛利元就により草津城が攻略される（注7）以前は、厳島神領衆であった羽仁越前守有繁の居城であり（注8），その後は、毛利氏傘下の水軍である川内衆を率いる児玉周防守守が入城していることがわかる（注9）。

このほかに、前述の『大内氏奉行人連署書状』に光井三郎次郎の名がみえ、すくなくとも、大永3年（1523）から同6年までの間は、城主ないしはそれに近い地位にあったようである。

## 2. 草津城の性格

瀬戸内海には、古くから九州・四国・中国と都を結ぶ内海航路が開けており、人物の往来や物資輸送の手段として内海の水運が利用されていた。そのうえ、平安時代の終り頃からは、宋船の北九州への渡航増加にともなって、外国航路とも結びつきを深め、内海航路は一段とその重要性を増していった。

これと並行するように、内海には海賊衆が横行し始め、南北朝時代になるとその動きが活発となり、室町時代から戦国時代にかけては、その出現がより頻繁になり広い範囲で活動を行なうようになっていった。

また、内海の海賊衆は警固衆とも呼ばれ、内海を航行する船を警固し、その代償として警固料をとり、その水先案内の役目をもつとめていた。

これら海賊衆の城は、現在では一般的に水軍城と呼ばれ、船の航行する海域をよく見渡すことのできる内海沿岸の半島丘陵や島嶼の山頂・湾頭丘陵などの内海航路の要衝に築城されている。通常、水軍城の郭・土塁・堀切などの遺構は、山城のものとはほぼ同様であるが、このほかに水軍城は、軍船を安全に係留するための船隠しや船溜りなど水軍城特有の遺構を持つものもみられ、本来、水軍城は常に軍船が臨機応変に出入りできるような施設をもつ城郭であったようである。

しかし、水軍城は交通の要衝の小山や丘陵に築かれることが多いため、後世の地形変更をうけやすく、これらめ遺構が残っている例は少ない。

今回調査を行った草津城においても、後世の地形変更が著しいため、水軍城とは断定しかねるが、本城は以下のような性格をもっている。

- ① 広島湾頭付近には、付表のように水軍とつながりの深い城郭がみられ、草津城は、厳島の宮尾城、廿市の桜尾城・黄金山の仁保城などとともに、広島湾頭における内海航路の要衝に位置している。
- ② 『国郡志御用下しらべ書出帳』（注10）、『芸藩通志』（注11）等の文書や絵図（注12）及び踏査を参考に当時の旧汀線を推定復元すると、第2回の青線のようになり、草津城の南半分は海に囲まれていること。
- ③ 当時の草津城は、三方を山に囲まれているため、他との連絡に峻険な山道を使用するより、海路を使用するほうが便利であること。
- ④ 『国郡志御用下しらべ書出帳』（注13）に大石石がんぎという以前に船溜りがあったことを想定させる名称がみられ、その位置が草津城D郭群の西方に比定されること。

⑤『国郡志御用下しらべ書出報』(注14)、「毛利元就同輝元連署書状」(注15)によると、毛利氏傘下の水軍である内警固衆を率いる鬼王就方の居城であること。

⑥「大内義長感状」(注16)によると、府中の白井賢胤が草津城下を襲い、船を奪っていること。

これらのことから、草津城は遅くとも大永3年(1523)にはその存在が確認され、以後連続的に營まれ、江戸時代初頭、元和元年(1615)の一国一城令が出された頃まで使用された水軍城の色彩の濃い城郭と言うことができる。

#### 付表

#### 広島湾頭付近の水軍関連城

名 称	所 在 地	標 高	概 要
草 津 城	広島市西区草津・田方	44m	今 回 報 告
八 木 城	タ 安佐南区佐東町	69	太田川右岸の独立低丘陵上に位置している。この城は香川氏の居城で、光景の代には仁保城番となっていたことから川内衆との関係も考えられる。城の西麓に土居の地名が残っている。
恵 下 山 城	タ 安佐北区高陽町	70	太田川左岸の低丘陵上にあって、西の太田川、南の諸木川を天然堀として利用し、太田川右岸の八木城と対峙している。
仁 保 城	タ 南区黄金山町	221	広島デルタ地帯の東南部の黄金山山頂に位置している。黄金山は現在では陸続きであるが、本来は広島湾に浮ぶ島の一つであった。城主としては、白井氏、香川氏、東林坊の名がみられる。
己 萩 (新) 城	タ 西区己斐町	220	広島湾西岸、大茶臼山より南東へ派生した丘陵先端部に位置し、東下を旧山陽道が通るという交通の要衝にあった。城主としては、嚴島神領衆の己斐氏の名がみられる。
矢 野 城	タ 安芸区矢野町	466	広島湾東岸、恵下山より北へ派生する丘陵尾根上に位置する。この城は熊谷氏の居城であったが、北朝方の攻撃をうけ落城している。このはか城主として野間氏の名がみられる。
桜 尾 城	佐伯郡廿日市町	31	廿日市の平地南東の独立丘陵上に位置しているが、本来は本城の裾部分まで海が入り込んでいたと思われる。城主としては、友田氏・鷺頭氏・新里氏・毛利氏・桂氏らの名がみられる。
宮 尾 城	佐伯郡宮島町	30	厳島の中央にそびえる弥山の尾根が北西に延びた舌状台地の先端を掘り切って築城されており、往時は城跡まで海が追っていたと考えられる。本城では弘治元年に厳島合戦が行われている。
出 張 城	安芸郡府中町	35	広島湾北東部、呉婆々宇山から南西に派生する一支丘陵先端部に位置し、古くから交通の要衝にあたる地域であった。城主としては、白井氏の名がみられる。

(注)

1. 「大内氏奉行人連署書状」,(大内家御判物井奉書写),『広島県史, 古代中世資料編V』所収。
2. 「大内氏奉行人連署奉書」,(大内家御判物井奉書写),『広島県史, 古代中世資料編V』所収。
3. 「房顕覚書」,『広島県史, 古代中世資料編III』所収。
4. 「大内義長感状」,『広島県史, 古代中世資料編V』所収。
5. 「閥閱錄」卷119。
6. 「芸藩通志」卷55。
7. 「房顕覚書」,『広島県史, 古代中世資料編III』所収。
8. 「閥閱錄」卷48。  
「房顕覚書」,『広島県史, 古代中世資料編III』所収。
9. 「閥閱錄」卷100。  
「森脇覚書」,『広島県史, 古代中世資料編I』所収。
10. 『草津村・国郡志御用下しらべ書出帳』
11. 『芸藩通志』卷49, 卷55。
12. 『古江村・国郡志御編集ニ二付下しらべ書出帳』  
『都見往來諸勝図』  
『小川家文書』
13. 『草津村・国郡志御用下しらべ書出帳』
14. 『草津村・国郡志御用下しらべ書出帳』
15. 「毛利元就同輝元連署書状」,『広島県史, 古代中世資料編V』所収。
16. 「大内義長感状」,『広島県史, 古代中世資料編V』所収。

(参考文献)

広島県教育委員会「瀬戸内水軍」1975年。

広島市役所『新修広島市史』第一卷1961年, 第二卷1958年, 第三卷1959年。

広島市教育委員会『山城』1982年。

佐伯郡教育会『佐伯郡志』1918年。

河合正治著『瀬戸内海の歴史』1977年。

草津町役場『草津案内』1924年。

下蒲刈町『多賀谷水軍と丸屋城跡』1981年。

新人物往来社『日本城郭大系』第13卷1980年。

上記の文献のほか, 種々の報告書を参考にした。

図 版



草津城跡全景（航空写真）



1. 草津城跡（調査前・北西から）



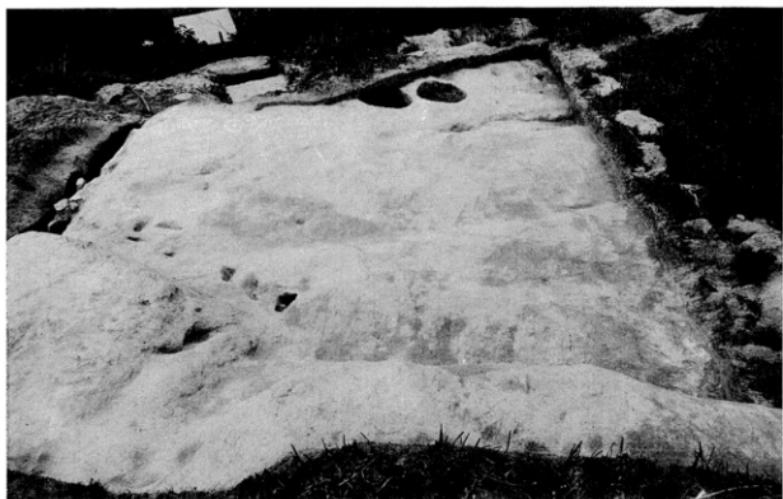
2. 草津城跡（調査後・北西から）



1. 第1郭・第2郭(南から)



2. 第1郭・第2郭(北から)



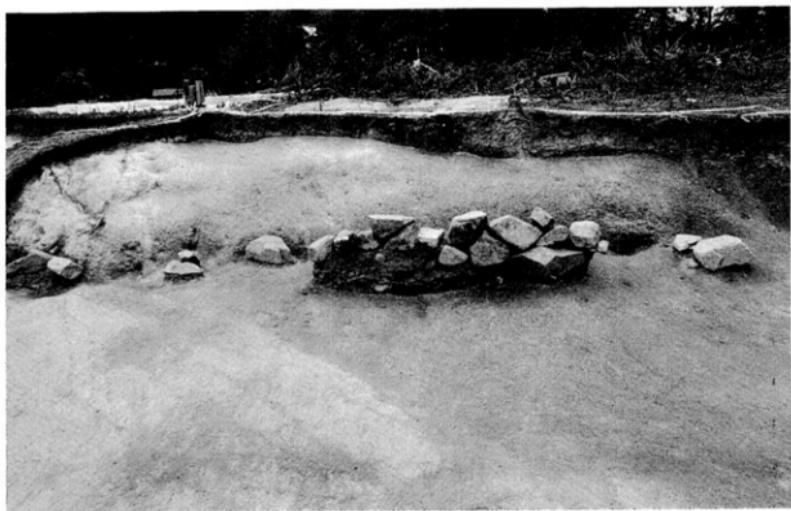
1. 第 3 郭 (南から)



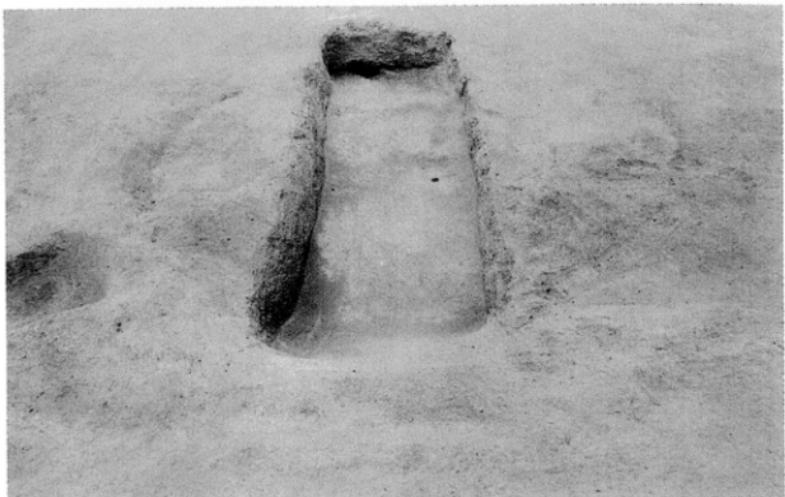
2. 第 1 郭 柱 穴 群



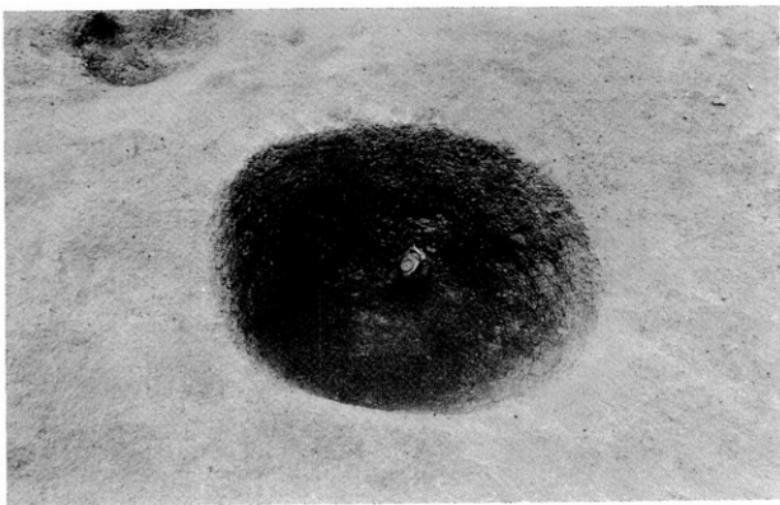
1. 石列（南から）



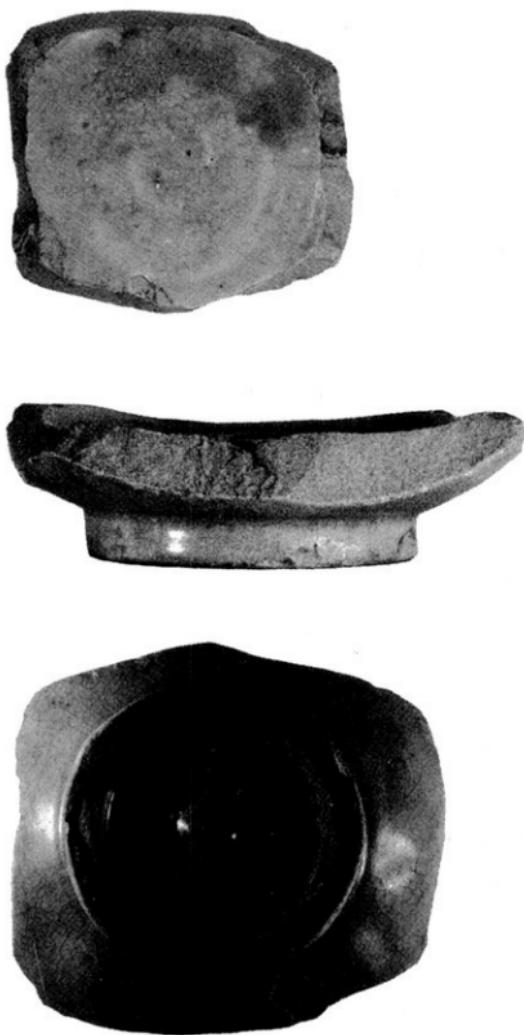
2. 石列（西側中央部分・西から）



1. 第 1 号土塚（西から）



2. 第 2 号土塚



青 磁 碗

広島市の文化財 第24集

広島市西区草津・田方所在

**草津城跡発掘調査報告**

1983年3月

編集発行 広島市教育委員会  
(社会教育部社会教育課)  
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号  
TEL (082) 245-2111 (代)

印刷所 電子印刷株式会社  
広島市中区郷町一丁目1番5号  
TEL (082) 232-3770